

咸宜園蔵書の形成と管理

鈴木 理 恵
(受理日二〇一六年十月六日)

はじめに

かつて、遠くに遊学することを「笈を負う」と言った。笈とは書籍を入れる箱で、それを背負って旅に出たことからこのように表現したのである。学問に書籍は不可欠であった。江戸時代は、出版業が発展したことによって、民衆でも版本を購入して学問することが可能になった。とはいえやはり書籍は高価で、しかも都市部以外では購入が難しかった。

文化一四年(一八一七)に広瀬淡窓によって開設された漢学塾咸宜園は、北部九州の中央にあたる豊後国日田に位置しながら、全国各地から入門者を集めた。遠隔地からの入門者は笈を背負って日田に赴いたのだろうか。淡窓は、教育方法に種々の創意工夫を施したことで知られる。多くの学問塾が一代限りで廃絶していったなかで、咸宜園が塾主を交替しながら明治三〇年(二八九七)まで継続し得た要因のひとつとして、システムティックな運営方法を採用し、臨機応変に改良を加えたことがあげられる。その特徴としてよく知られるのは、三奪法と月旦評による実力主義教育、厳格な塾則にもとづく寄宿生活、漢詩重視である。蔵書を形成して塾生に閲覧の便を図ったのもその一環である。

咸宜園蔵書については、杉本勲、横山伊徳のそれぞれによる共同研究の成果がある⁽¹⁾。蔵書目録が中村幸彦や井上敏幸らによって『広瀬先賢文庫目録』として刊行されている⁽²⁾。近年では三澤勝己が成果を続けて発表しており注目される⁽³⁾。しかし、咸宜園蔵書がどのように形成され、管理されたのかといった実態については明らかにされていない。そこで本稿ではまず、淡窓塾主時代末期の弘化年間から、明治初期の第四代塾主(広瀬林外、文久三

年)明治五年の塾主)時代までを対象に、蔵書の形成や管理について検討する。次いでそれ以降の時期を対象に、蔵書の保管維持について検討する。咸宜園は、明治七年(一八七四)に林外が死去し、第五代塾主唐川即定が辞したために閉鎖された。その後再興されたものの、咸宜園経営のあり方には同年を境に大きな変化があったと思われる。そのため、同年に西期を置く。

本稿で使用する主な史料は、咸宜園の旧蔵書とその目録である。いずれも日田市の公益財団法人廣瀬資料館(淡窓生家跡)の先賢文庫に所蔵されている。同文庫の史料は、広瀬家蔵書(家宝書、一般書)と咸宜園蔵書に分けて『広瀬先賢文庫目録』に掲載されている。咸宜園蔵書の部には、咸宜園蔵書(和刻本と唐本に区別される)と第二代塾主広瀬旭荘(天保二年)同七年の塾主)の蔵書が、架蔵される箱番号ごとに記されている。本稿で同文庫所蔵史料を取り上げる際には、同目録中の家宝・一般・咸宜園の別とともに各史料に付された架蔵番号を(家宝9-1-5)というように表記する。また、立川市の国文学研究資料館廣瀬青邨文庫にも咸宜園蔵書目録が所蔵されている。青邨文庫には、第三代塾主青邨(安政二年)文久三年の塾主)⁽⁴⁾の子孫から寄贈された史料が収められている。同文庫中の史料を使用する際には、架蔵番号を(青邨文庫17)といったように表記する。

日記史料として、淡窓・林外・青邨の日記と『咸宜園日記』を使用する。『淡窓日記』については、『増補淡窓全集』に収録されたものを使用する。『林外日記』と『咸宜園日記』は先賢文庫に、『青邨日記』は青邨文庫に所蔵されている⁽⁵⁾。

1 蔵書の形成―蔵書銭の徴収と書籍の購入―

咸宜園では塾生から徴収した「蔵書銭」で書籍を購入して蔵書を形成し、閲覧に供していた。本節では、蔵書銭徴収の実態や購入された書籍について明らかにする。

三澤勝己は、蔵書銭徴収を開始したのが、淡窓の末弟広瀬旭荘であったことを、次の史料にもとづいて指摘している⁽⁶⁾。

① 柴秋村「爾舎義書目録序」⁽⁷⁾

宜園僻^レ在海西。人氣醇樸。勤学力行。而蔵書甚寡。旭荘先生創^レ眞^二義書^一。其法每^レ人月納^二五十錢^一。借読者加^二十錢^一。卷首皆鈐^二三印^一。文曰。宜園蔵書。曰。月益日加無^レ尺蔵。曰。社外雖親戚故人。不許借覽。立^二監一人^一。謹記^二出納^一。翻^レ火覆^レ油者有^レ罰。捲^レ腦折^レ角者有^レ罰。先生東徙後。任^二都講舎長^一者。一仍^二其法^一。積至^二五千余卷^一。今四方遊士。不^レ負^レ箠^レ笈^レ而獲^二觀群籍^一。先生之力也。

これを書いた柴秋村は、嘉永二年（一八四九）七月に大坂の旭荘の塾（爾舎）に入門した。同六年八月に旭荘とともに塾蔵書の点検をなし、目録を作成していることが、旭荘の日記から知れる。従って、右はその蔵書目録の序文として書かれたものと、三澤は指摘する。

序文のなかでも咸宜園蔵書に関する記述のみ右に掲載した。咸宜園は、出版業の栄えた大坂からはるか西に位置していたため蔵書が少なかった。そこで、旭荘が「義書」を創始したという。その方法とは、書籍を購入するために、塾生各人から五〇銭を月納させ、蔵書を借用した者には一〇銭を追加納付させるといったものであった。同時に旭荘は、三種類の蔵書印（後述するよう右の印の字句には誤りがある）を書籍の巻首に押し、蔵書監一人を置いて出納を記録させた。また、書籍を油で汚損する者や捲いたり折ったりする者を罰した。

旭荘は天保七年（一八三六）に日田を離れて堺に移ったが、旭荘が創始した「義書」の法や蔵書管理法は、その後も咸宜園の都講や舎長によって維持され、蔵書は五千巻余りに達したという。遠方からの遊学者が書籍箱を背負わずにやってきても、咸宜園で多くの書籍を閲覧することができるのは、ひとえに旭荘の尽力によるものだと秋村はいう。

三澤は、旭荘が「義書」を始めたのは、病床に伏していた淡窓に代わって塾政を執った文政九年（一八二六）のことだろうと推測している。それは、旭荘自身が『九桂草堂隨筆』巻九のなかで「二十ノ年ハ、淡窓公常ニ臥シ玉

ヘル故、余塾政ヲ聞ケリ。此時塾ノ余銭ヲ多ク仕立テ、又蔵書ヲ買フコトヲ始メタリ」と書いていることから裏付けられるという⁽⁸⁾。

いっぽう、次のような史料も残されている。

② 『謙吉江致付属候品々目録』⁽⁹⁾（青邨文庫16）

一蔵書 別紙目録有之 代銭三百三十拾貫文余

是八十年來諸生一人前一日ニ式銅宛取立候而買入候分也、此法廢り不申候ハ此後も段々増し可申候、名目ハ諸生之物ナレトモ実ハ此方之物同様ニ而珍重之物也、疎略なき様可致事、

これは、天保元年（一八三〇）淡窓が旭荘（謙吉）に、塾政とともに譲渡した物品目録のなかの蔵書の項目である。注目されるのは、「別紙目録」の蔵書が、塾生各人から一日あたり二銅ずつ、一〇年間をかけて取り立てられた三三〇貫文余りで購入されたものであったということである。天保元年から逆算して一〇年前とは文政三年（一八二〇）にあたる。同年に徴収を始めたとすれば、淡窓が蔵書銭の創始者と考えるのが妥当であろう。そもそも淡窓は、咸宜園を開く以前から日湊銭を始めていた。文化四年（一八〇七）に桂林園という塾舎を建築した時の借金を、塾生一人一日三銭ずつを取り立てる日湊銭によって返済して以来、咸宜園でも建物の修復営繕のための費用として徴収を継続していた⁽¹⁰⁾。淡窓が蔵書銭徴収を思いつくのは自然なことである。

蔵書銭の創始者については旭荘か淡窓か決し難いが、いずれにしても文政年間が始まったことは確かである。文政年間の徴収額は、史料⁽²⁾によれば塾生一人あたり一日二銅となっていたが、咸宜園門人武谷祐之の回想によれば、月六〇文だったという。祐之は天保七〜一四年に在籍したので、次の記述はその当時の状況とみなせる。

③ 武谷祐之「南柯一夢」⁽¹¹⁾

蔵書監ハ亦舎長次席ヨリ任ス、蔵書ノ出納ヲ司ル、一人一部ヲ仮貸シ了リテ他書ヲ仮貸シ、一時ニ数部ヲ仮サス。大部ノ書ハ五六冊宛仮貸ス。中・下等生之ヲ仮ル、月ニ六十文ヲ納ル。上等ノ生ハ仮ルモ否モ亦之ヲ納ル、貯蓄シ置乏ノ書ヲ購求ス。四書五経・蒙求・十八史略・文章軌範・国史略・日本外史等ノ書ハ数十部宛備へ、廿一史・十三経其他子類詩文集及雜書等モ備へ仮貸ス。遠隔ヨリ來遊ノモノニハ大二便利ヲ与へリ。ひとり一回につき一部を借用でき、大部の書籍については五、六冊に分けて借りることができた。中下等生は、書籍を借りた場合には蔵書銭を支払った。上等生になると、借用の有無に関わらず支払わなければならないと

いう。塾生は成績によって、下等（無級）、中等（四級以下）、上等（五級以上）と分けられ、中下等生に課業が、上等生に試業が課された。課業は毎日の素読・輪読・輪講・会講などから、試業は月九回の詩・文・書・句読からなつた。中下等生は、課業で書籍を使用したから、蔵書借用の機会が多かつただろう。

四書・五経などの基本的な書籍についてはそれぞれ数十部を備えていたと記されているが、それを裏付ける史料はない。現存する最も古い目録『咸宜園蔵書目録』（家宝11-42）に『十八史略』が五部三十五本、四書が四部四十本、『小学』が七部（一部端本）二十六本、『蒙求』が六部（一部端本）二十二本、所蔵されていたことが記されている。先賢文庫に残る『論語集註』（家宝書19-1）の裏表紙見返「宜園蔵書／四書四部之内」は改行を示す、以下同様、『小学句読』（一般7-30）巻三・四・六の裏表紙見返「宜園蔵書／小学六部之内」などの書き込みからみても、多くてもせいぜい六、七部にとどまる。

咸宜園の規約類のなかに蔵書錢に関する規定はない。明治期に書かれた「塾則」（家宝11-44-1）では、「財用」の項目のなかに「月謝塾費食料（蔵書費）等ハ毎月前定ノ事 但月謝ハ金廿五錢、塾費ハ外来生金五錢、内塾生金八錢、食料ハ金壹圓五十錢内外、（蔵書費ハ蔵書ヲ借覽スルト否ト二拘ハラズ金一錢トス）」¹²とされているが、（ ）内は後筆であり、これが実際に機能していたのかどうか疑われる。

表1に、弘化元年（一八四四）から慶応元年（一八六五）までの年間ごとの蔵書錢総額と購入された書籍を掲げた。この表は、「宜園関係会計簿」（家宝5-4-3）や『養老編・養老外編』（家宝19-6）¹³をもとに作成した。会計簿によると、蔵書錢徴収によって毎年三〇貫前後の収入があつた。蔵書錢は、月ごとに「内塾」と「外宿」に区別して集計されている。「内塾」は塾内寄宿生を、「外宿」は市中に下宿していた塾生を指す。より蔵書利用率が高い内塾生から多く徴収するように差が設けられていたのだろうが、詳細は不明である。

購入書籍をみると、まず、出版されて間もない新本が購入されていることがわかる。天保一四年（一八四三）に出た『古今学変』が弘化元年（一八四四）に、文久元年の『四書日講』『日本政記』が同二年に購入されていることとくである。淡窓塾主時代は毎年筆写料に費やされているが、後にはそれがほとんど見られない。文久二年に『詩経』『尚書』『史略』がそれぞれ一〇部前後、慶応元年に『蒙求』四部が購入されているが、これらは蔵書に入れるためではなく塾生への売本であつたようで、同三年にかけて売却され、その代金が蔵書錢

とともに収入に計上されている。

年によって購入書籍数に大きな違いが見られる。淡窓の生前は購入数が少ない。淡窓時代の会計簿『養老編』によれば、弘化元年の蔵書錢徴収総額は四五貫文ほどにのぼつた。前年の繰越金とあわせて収入一〇六貫八二三文に対して、支出は一六貫五二八文にとどまつたため、九〇貫三四五文を残した。この繰越金と弘化二年の蔵書錢徴収総額とあわせて一二〇貫文ほどに達したはずだが、この年に多額の出費があつたらしく、翌三年の収入は七四貫七四三文（蔵書錢徴収額を含む）に激減している。だから弘化二年の購入書籍数は表1よりはるかに多かつたはずだが、別簿に記載されたためか、『養老編』にはその書籍名がない。同三年の支出は一七貫五九七文に抑えられたため、五七貫一四六文を翌年に繰り越した。このように、淡窓は蔵書錢を毎年使い切るのではなく、積金をしておいて、多額の支出に備えたようだが、青邨・林外塾主時代には逆に赤字続きだつた。

〔宜園関係会計簿〕中の『家塾経費録』『宜園会計録』によれば、文久元年の蔵書費は八貫三三文が残つたが、同二年は二三両一步三朱の不足、同三年は一四両三步一朱の不足となつた。青邨・林外塾主時代の咸宜園の財政については井上義巳が、淡窓の千五百両余に及ぶ遺金を切り崩しながら経営を続けていたことや、林外が咸宜園大改修をおこなつたために明治初期に莫大な負債を抱えることになつたことなどを明らかにしている¹⁴。また、会計簿の記述から、文久元年五月に青邨から林外への塾主交替があつたことを指摘している。表1に見られる、年による購入書籍数の違いは、こうした塾主による経営のあり方を反映したものであろう。

蔵書に入れる書籍は、大坂の河内屋茂兵衛から購入した。淡窓は天保八年の『遠思楼詩鈔』初編¹⁵以来著作物の出版を河内屋茂兵衛に任せていたので、同書肆とは強いつながりがあつた。同書肆から取り寄せた自らの出版著作物を塾内で販売することもしていた。

2 蔵書の管理

（1）蔵書監

咸宜園では蔵書監を置いて蔵書を管理させた。本節では、蔵書監の歴任者、蔵書を管理するために作成された蔵書目録について検討する。

咸宜園の規約類のなかで蔵書監の規定は、「嘉永五年壬子改正塾約」¹⁶に「我家ノ器具ハ。以塾長可借。書物類ハ蔵書監ヲ以テ可借。皆瑣細ノ物ヲ

表1 蔵書銭徴収と購入書籍

年・収入	購入・筆写書籍	支出	現存書籍 (冊数・刊年・先賢文庫)	年・収入	購入・筆写書籍	支出	現存書籍 (冊数・刊年・先賢文庫)
弘化元年 (1844)	梅辻春樵集二編 古今雑抄七律 合44,187 (内34,043 (外10,615)	1,710 写料508 12匁5分 3匁5分 写料1,550	天保7跋・咸27-10 天保14・咸35-21 2巻3冊欠・一般写1-5	文久2年 (1862)	宋庵墨談 常山紀談30本 侗菴筆記 菱湖帖 詩経12部 尚書7部 史略10部 太平御覧153巻 瀛環志略10巻 四書日講18巻 栗山文集5巻 枕上集4巻 元詩自攜10巻 三省録5巻 資治通鑑148巻 日本政記16巻 清名家小伝4巻	18匁5分 68匁 4匁3分 1朱 20000 6750 25000 12両2歩 1両 1両 3朱 2朱 2歩 2朱	嘉永5・咸35-17 文久元跋・咸51~53 10巻10冊・文久元・咸19-1 文久元・咸7-1 21巻10冊・安政5・咸33-12 5巻5冊・天保14・咸30-2 16巻16冊・文久元・咸47-1 3巻3冊欠・咸17-5
弘化2年 合31,507 (内22,369 (外 9,138)	老子考 唐宋詩醇 史記	写料1,055 1両2歩 100目		合25,959 (内16,614 (外 9,345)			
弘化3年 合40,521 (内31,949 (外 8,572)	引痘全編 四書 夜雨寮筆記	写料600 1,507 写料680					
嘉永3年 (1850)	莊子註疏 左伝 甘雨亭叢書三編 撰東七家 花月草紙	2歩2朱 17匁5分 12匁 写料-	嘉永元・咸46-24 7巻5冊・一般詩1-12	文久3年 合26,319 (内19,694 (外 6,625)	紫芝園隨筆 九経談	2歩 2朱	嘉永5・咸35-1 文化7・咸7-3
安政4 ~5年 (1857 ~58)	大東世語 明文苑伝 明季遺聞 出定笑語 泊鷗山房集 湖海詩伝	- - - - -	4巻2冊・明和7・咸17-3 4巻2冊・寛文2後語・咸25-14 4巻4冊・嘉永2序・咸42-7 38巻16冊・唐11-2 46巻16冊・嘉慶8・唐4-1	元治元年 (1864)	褚遂良枯樹賦 外史大本 魏叔子文選要 陳白沙文抄 宋学士文粹 汪堯峰文選要 王陽明文粹 龍州先生集要 方正学文粹 魏叔子文選要 孝経 五代史	2歩 95匁 12匁5分 12匁5分 12匁5分 7匁 10匁 15匁 14匁 12匁 2匁 1歩	3巻3冊・安政5序・咸24-14 3巻3冊・元治元・咸24-11 3巻3冊・元治元・咸24-8 2巻2冊・文久2・咸24-13 4巻4冊・文政11・咸24-7 6巻6冊・嘉永3序・咸24-3 6巻4冊・文政12・咸24-9
安政6年 (1859)	武家盛衰記12本 神徳記8本 武將感状記10本 王代一覽7本 王代一覽続編10本	48匁 38匁 13匁 15匁 22匁	6巻6冊欠・咸30-3 6巻6冊欠・正徳6序・咸30-1 7巻7冊・咸21-4 10巻10冊・嘉永3序・咸21-4	29,899 (内18,649 (外11,250)			
万延元年 (1860)	源氏評釈 鐵研余滴 永代節用 古今集遠鏡 六合叢談 地球略説 中外新報	30目 8匁5分 22匁 23匁 10匁	4巻4冊・咸35-23 6巻6冊・一般13-2 8巻8冊・咸19-2	慶応元年 (1865)	韓非子 荀子 世説箋本 国策 韓蘇詩抄 浙江詩評 皇朝史略 日本外史補 文章軌範 朱竹垞文粹 皇朝戰略論 中興鑑言 ■字義 蒙求4部 五経11本 算法便覧7本 文選12本 靖献遺言3本 周易折中 廿七松堂	3歩 2歩1朱 3歩2朱 1両 2朱 2両2朱 1朱と200文 2朱 2歩2朱 1300 4550 1710 1400 3歩2朱 2朱 3両	20巻10冊・文政9・咸13-2 7巻3冊・嘉永7・咸33-4 17巻15冊・咸55-2 12巻4冊・天保5序・咸47-3 6巻6冊・天保5・咸24-12 15巻15冊・安政3・咸28-4 1冊・咸29-7 8巻3冊・咸13-3 22巻20冊・康熙54序・咸1-1
文久元年 (1861)	浙西六家詩抄 近世人鏡録 文語解5冊 張岳松石刻 成親王百家姓摺書 鷗陽公選詩帖 梁国治千字文 燕沢碑摺本 出雲国風土記 周易伝義 不尽岳志 羅山集 ■榮 近世名家詩鈔	1,000 3,420 600 380 380 380 500 300 1,500 1,700 200 3歩2朱 写料1朱 1歩	嘉永6・咸33-13 文政4序・咸28-2 5巻5冊・明和9・咸41-5 24巻8冊・寛永4奥・咸1-2 1冊・咸35-19 60冊・咸37 3巻3冊・安政5・一般詩1-10	45,244 (内28,789 (外16,455)			
文久2年 (1862)	昭代文鈔 桜花帖 秋萩帖	100疋 8匁5分 10匁					

註1) 本表は、『宜園関係会計簿』中の『家塾経費録』『宜園会計録』、『養老編・養老外編』、『校正東家蔵書目録』をもとに作成した。
 2) 現存書籍が特定できるものについては『広瀬先賢文庫目録』によって、刊年と冊数を示した。
 3) 収入欄の「内」は内塾生を、「外」は外宿生を示し、「合」はその徴収額(文)の合計を示す。

リトモ。借券ヲ出シ。且預メ返ノ日限ヲ書き載スルコト」と見える。明治期の「塾則」(家宝11-44-1)の「職掌」の項目に蔵書監について「蔵書ノ出入ヲ監視シ又其保存ヲ計画ス、一 蔵書監ハ毎月三十日自席ニ於テ諸生ニ貸渡シタル書籍ノ検閲ヲ為スヘシ」とあるが、先述したように、これが実際に適用されたかどうかは不明である。

蔵書監の歴任者を具体的に見ていこう。その初見は、『淡窓日記』文政一一年(一八二八)一〇月二六日条に現れる積徳令(木屋石門)である。塾長と蔵書監を兼務していた。徳令は、同五年に入門し、蔵書監当時は二六歳で、準六級に昇っていた。別に掌印として蘭溪が任ぜられていた。掌印は、その名称から、蔵書印を管理して書籍に押印する役職と考えられる。

次いで『淡窓日記』文政一二年七月二六日条に桑原純吾が現れる。純吾は同年三月に入門し、七月には早くも三級上に昇り、蔵書監に就いたのである。その後六級上まで昇級して天保三年(一八三二)五月に大帰(卒業退塾)した。秦春甫は、『淡窓日記』弘化元年(一八四四)六月九日条に「蔵書監兼掌印」として登場する。当時一七歳で、月旦評では四権六級上に位置した。春甫は、天保一三年(一八四二)七月に入門したが、その年末には権四級下に昇り、翌年二月に常侍史に就いた。弘化四年(一八四七)に三権九級下で舎長に任ぜられ、翌年二月の大帰時に淡窓に「才子」と評された。

『淡窓日記』弘化四年五月二日条に数馬が蔵書監として登場する。当時二権六級上であった。数馬については、入門簿にそれらしき人物が見当たらない。弘化三年七月から同五年八月の大帰に至るまで三年間常侍史を勤めた。淡窓は大帰に当たり、数馬について「其人怒笑。才則不_レ及_二中品_一。其別可_レ惜」と書いている。

吉富亀次郎は、嘉永六年(一八五三)正月にわずか一一歳で入門した。当月に早くも二真三級下に昇り、同年末には二権六級上で常侍史に就いた。『林外日記』嘉永七年正月四日条に東家蔵書監に命じられたことが記されている。同年末に四権八級上で権舎長に、同八年七月には三権九級下で舎長に就き、同年一〇月に準都講となった。

徳蔵は、『咸宜園日記』文久二年(一八六二)六月一六日条に「南塾長兼西家蔵書監」として、同年八月晦日条に「東塾長兼東家蔵書監」として登場する。徳蔵の入門年や月日評上の位置については不明である。徳蔵の例によって、東西に蔵書監が置かれていたこと、一人が両方を歴任できたことがわかる。この頃のものと思われる『家塾職掌及年中行事』(青邨文庫139)でも蔵書監は東西に分けられ、東家蔵書監は講堂長兼職であることが記されている。

咸宜園の建物は、道路を挟んで東西に分かれ、「東家」「西家」と呼ばれていた。「東家」には塾主居宅である秋風庵や講堂、東塾などがあり、「西家」には考槃楼や西塾が建てられていた。蔵書も東西それぞれに保管され、それを管理する蔵書監も個別に置かれていたのである。

大渡又三郎は、『咸宜園日記』文久二年八月晦日条に「為_二南塾長兼西家蔵書監_一、為_二履監_一如_レ故」と出る。万延元年(一八六〇)三月に入門し、蔵書監に就いた時には二〇歳であった。月旦評上の位置は不明である。

以上のほかに、蔵書監歴任者として、水築新、南方厚蔵、石田鐵平、亀谷省軒、高嶋節之輔、広瀬敬四郎などがあげられる⁽¹⁷⁾。これら詳細不明の者を別にすると、蔵書監歴任者の傾向として、六級で蔵書監に就いていること、常侍史を歴任していること、舎長や塾長などの枢要の職に昇っていることなどを看取できる。一二歳で就いた例があったことから、若年者でも勤めることができたようである。史料③で武谷祐之が「蔵書監ハ亦舎長次席ヨリ任ス」と記していたが、実際に成績優秀な者が蔵書監に任ぜられたことを確認できた。

(2) 蔵書目録の作成

咸宜園で蔵書目録が最初に作成された時期は不明である。史料②で見たように、遅くとも天保元年には蔵書目録に相当するものが存在した。『淡窓日記』によれば、弘化元年(一八四四)三月一五・一六日に、淡窓は蔵書を檢閲して函筒を整理しているが、蔵書目録についての記載はない。嘉永七年(一八五四)閏七月三日条に「与_二孝之助_一檢_二蔵書_一。作簿」とあって、淡窓と孝之助(林外)は蔵書を檢閲して簿冊を作成していた。孝之助は旭莊の子であり、淡窓の甥に当たるが、ここでは都講⁽¹⁸⁾として淡窓の補助をしている。翌日も作業は続いた。淡窓は「久不_レ檢_二蔵書_一。至_レ此審_二卷典_一。定_二箱函_一。且嚴_二仮借法_一。庶无_二紛失_一耳」と日記に記しており、巻典を審らかにして、各書籍の保管箱を定め、簿冊を作成した。また、仮借法を厳密にして書籍の紛失を防ごうとしたようだ⁽¹⁹⁾。この時に目録が作成されたのではないだろうか。

現存する最も古い目録は『咸宜園蔵書目録』(家宝11-42)と『校正東家蔵書目録』(家宝11-43)である。後者は東家の蔵書目録で、内題「東観蔵書目録」の下に「丁巳改正」と記されているので、安政四年に作成されたことが明らかである。奥に蔵書監水築新と書記積凌雲の記名があり、凌雲は同年五月に入門していることから同日録はそれ以降にふたりによって作成されることがわかる。いっぽうの『咸宜園蔵書目録』は、西家の蔵書目録と考えられる。その根拠の第一は、同日録中に記載された「藩翰譜」の下に後筆の

割書で「丁巳六月念八日／于藏家東」とあり、さらにその脇に後筆で「ナヲ西家ニアリ」とあること、第二に、同日録中に記載された書籍のなかで現存する『和漢年契』（一般41-35）と『小学』（一般7-31）の奥にそれぞれ「西家蔵書」、「西塾」と記されていることである。

『咸宜園蔵書目録』（以下、西家目録と略す）は二三丁からなり、末尾に別紙二丁が加えられている。『校正東家蔵書目録』（以下、東家目録と略す）は四七丁からなる。いずれも、後代に表紙がつけられている。いったん作成されたのち、蔵書の増加や紛失に伴って増訂されている。

西家目録は一五丁からなる「咸宜園蔵書目録」と八丁からなる「野菊村雑処」上下に分けられている。「咸宜園蔵書目録」は、半丁に五行つまり五本の書籍の名称と本数が列挙されている。合計一〇七点一〇八七冊が、「通鑑綱目」から始まり、「第一」から「第二十二」に分けられている。「通鑑綱目」は、全一七本が四筐に分けて保管されていたことが記されている。「第二」には「歴史綱鑑 四十本」と「泰平年表 七本」の計四七冊、「第二」には「漢書 五十本」といった具合に、まとまった冊数にひとつの番号があてられているから、「第一」から「第二十二」は書籍を保管した箱の番号を指すのであろう。つまり、この蔵書目録は架蔵状態をも示している。

「野菊村雑処上」は、半丁に五行ずつ三丁にわたり書名と本数が書かれ、そのあとに続く「野菊村雑処下」も同様の形式で五丁に及ぶ。上下あわせて七七点六〇一冊となる。「咸宜園蔵書目録」と「野菊村雑処」上下は筆跡や記載様式が同じであることから、同一人物によって書かれたものと考えられる⁽²⁰⁾。ただ、各目録に記載された書名を現存書籍と対照検討したところ、作成時期は異なるようだ。「咸宜園蔵書目録」所載書籍には文化・天保年間の刊記を持つものが比較的多い。「克己篇」（家宝10-1-5）が嘉永四年（一八五二）の題言を持ち、現在確認できるなかで最も新しい。それに対して、「野菊村雑処」所載書籍は弘化・嘉永年間の刊記を持つものが比較的多い。最も新しいのは安政四年序を持つ『彙纂詩法纂要』（咸34-7）である。また、少なくとも一点は嘉永三年から万延元年（一八六〇）にかけて購入されたことが明らかで、特に安政六年購入本が六点を占める。これらのことから、「咸宜園蔵書目録」がより古いもので、嘉永・安政年間以前の蔵書内容を示すものといえる。「野菊村雑処」は、安政年間以後万延元年までに蔵書に加えられたものが中心を占める。

巻末に添付された別紙二枚の綴は、半丁七行で書かれ、合計二七点一五二冊に及ぶ。そのうちの一点は万延元年から文久二年上半期までに購入され

たことが明らかである。原表紙見返に記された一〇点は、すべてが文久二年下半期⁽²¹⁾に購入されたことが明らかである。これらのことから、別紙綴は文久二年に、原表紙見返は同二年末以降に補訂されたものとみられる。

本文と別紙綴と原表紙見返の筆跡はそれぞれ異なるので、三人の手が入っているのだろう。蔵書の点検を行った際に付けられたとみられる、や〇の印があるものの、東家目録に比べれば少ない。

東家目録は、一五丁から成る「東観蔵書目録」と二六丁から成る「荅陽閣蔵書目録」に分けられているが、同時期に同筆で作成されている。半丁に六行で六本の書籍名と本数が列挙されている。全体におびただしい数の、○や△などの印が墨や朱で加えられており、本目録が蔵書点検に利用されていたことを彷彿させる。そのためか二〇丁余りにわたり下部が破損している。

「東観蔵書目録」は「第一行」から「第六行」まで分けられ、第一行二〇点一一三本、第二行二〇点一〇八本、第三行一六点一三三本、第四行四一〇点一一二本、第五行六六六点一七八本、第六行三三六六本、合計一六六六七二九本が記載されている。「荅陽閣蔵書目録」は、「第一箱」から「第三十七箱」までの架蔵箱別に書籍が記されている。現存書籍と対照して検討すると、「荅陽閣蔵書目録」の「第一箱」から「第十七箱」までに記載された書籍は唐本であり、「第二十七箱」にも唐本が多い。西家目録には唐本は二〇点ほどしか確認できないので、咸宜園蔵書中の唐本はほぼ東家の荅陽閣に保管されていたとみられる。

「東観」と「荅陽閣」は建物名を示すと考えられる。東観は「春秋園」とも書かれているが、具体的にどの建物を指すのか不明である。『咸宜園日記』元治元年五月一日条に「謁先生於講堂、午後閣蔵書分西東、西蔵於考槃樓、東東荅陽閣」とあるので、当時の西家では考槃樓に、東家では荅陽閣に蔵書が保管されていたことがうかがえる。

記載された書籍総数は、西家目録が二二九点二四三三冊、東家目録が四九九点二九八二冊以上⁽²²⁾に及び、両目録の合計は七三三八点約五四一五冊以上に達する。史料⁽²⁾で、旭荘が蔵書錢徴収を創始して以来嘉永六年までに蔵書が積もって五千巻余りに達したと記されていたが、その数値ともほぼ合致する。しかし、これらの書籍すべてが、塾生から徴収された蔵書錢によって購入されたとは考えられない。淡窓の個人蔵書を加えたからこそ、この冊数を確保できたのではないだろうか。淡窓の蔵書については、諸史料にほとんど記載がない。『淡窓日記』文政二年八月九日条に「淡窓」（書斎）が雨漏りしたため、女中や塾生に書籍を移動させたという記載がある。『万善簿』

天保七年七月一〇日条には「荀子二部借^レ塾」とあって淡窓は自分の蔵書から『荀子』二部を塾に貸し出しているから、淡窓の蔵書が塾蔵書とは別置されていたことがうかがえる。『万善簿』同一三年二月二日条には「出^レ蔵書入^レ塾」とある。これも淡窓の蔵書を貸し出したことを意味するのか、それとも淡窓蔵書を拠出して咸宜園蔵書に含めたことを意味するのか不明である。

現存書籍のなかに淡窓の蔵書印が押されたものが極めて少ないことは、もともと淡窓個人の蔵書が少なかったことを思わせる。先賢文庫に保管される書籍の印記は、咸宜園関連（ア「宜園之蔵書」、イ「同社之外雖親戚故人社外不許借覽」、ウ「日益月加無尽蔵」、エ「宜園蔵書」、カ「廣瀬家関連（廣瀬氏本家）」、「廣瀬氏本家旧蔵」）、旭莊関連（「旭莊珍蔵」）に大別される。咸宜園蔵書すべてに蔵書印が押されているわけではないものの、押されている場合にはアイウカウエの組み合わせが多い。アイウ三つが押された場合には縦一列にアイウの順に並べられる規則性がある。広瀬家蔵書印は、後代に施されたものである。これらに対して淡窓の蔵書であることを示す「広瀬建印」「子基」が押された書籍は極めて少ない。このことは、ある段階で、わずかな書籍を除いて淡窓の蔵書の多くが塾蔵書に入れられたことを想像させるが、その検証は難しい。

淡窓に比して旭莊や青邨の蔵書は多い。天保七年に堺へ移る際に家具や書籍を淡窓に預けていったことが『淡窓日記』の四月一六日条や六月二三日条からうかがえる。旭莊死後に作成された「文敏公蔵書目録」には一〇一点一七三冊五七帙が記録されている²³。青邨も嘉永四年七月一〇日条の日記に「晒^三予蔵書、一々録^レ之」とあるので、当時から蔵書目録を作成していたようすがうかがえるが、青邨文庫に蔵書目録が残されている。

3 蔵書の保管維持

咸宜園は、明治七年（一八七四）にいったん閉鎖された。そこで、同年以降の蔵書の冊数や保管方法を記した史料を時系列で追いながら、咸宜園蔵書の保管維持の状況を確認していくことにしよう。まず、史料④は青邨（範治）によって負債返済や維持管理のための改革案として、屋宅田園・貸付・借用などの項目にわたって書かれているなかの「書籍」の部分である。全七条のうち第一条および第六条を掲げた。

④ 明治七年九月八日付広瀬範治「咸宜園改革二付愚考」²⁴

第一条 咸宜園蔵書・旭莊蔵書と二ツ二分ち有之ニ付、今般取調候目録二通ニいたし置候事、

第六条 今般御布達ニ付蔵書目録さし出シ置候、若シ右書中ニ御用本等有之候節ハ夫々手数相か、り候間誰成共相雇ひ候而用弁いたし候様いたし度事、

第一条によって、従来から咸宜園蔵書と旭莊蔵書に二分されていた保管状態に従って目録が二通作成されたことがわかる。第六条によれば、その蔵書目録は、布達に応じて提出するために作成されたものであった。このときに提出された目録の下書きが、「咸宜園蔵書目録 旭莊蔵書目録」（青邨文庫17）である。表紙に「明治七甲戌九月八日県庁江差出候節之下書」とある。広瀬敬四郎（旭莊の子）の監修によって作成された。両目録が綴じられて一冊になっており、それぞれの目録の末尾に合計冊数が記されている。咸宜園蔵書は「通計五百八十二部 五千九十七本 内三十九本欠」、旭莊蔵書は「通計百六十三部 千四十二本 内一本欠」で両方の総計は「七百四十五部 六千三百三十九本 内四十本欠」となっている。いずれも架蔵状態に即した目録になっているが、注目されるのは、それらが『広瀬先賢文庫目録』の記載順序に近いということである。つまり、遅くとも明治七年には、現在の架蔵状態の原型が作られ、それが継承されてきたといえる。

『旧幕府領地内家塾』（青邨文庫14）は明治一六年（一八八三）の文部省調査に応じて提出したものの控えである。「塾主行事及著書蔵書」の項目に「蔵書ハ和漢書籍凡五千巻」と記されている。文部省が発行した『日本教育史資料九』の大分県の部に咸宜園はないが、附録に「広瀬建私塾」として詳細に掲載されている。そのなかに「蔵書ノ種類部数 経書八十七部 歴史和漢五十六部、諸子類十二部、詩文集三百六十二部、雑書五百四十七部」²⁵として、合計一〇六四部の蔵書が分類されて記載されている。

明治二三年（一八九〇）に発行された雑誌『咸宜園』第一集の「雑纂」で、大分県庁に届け出た咸宜園の概要を掲載したなかに「蔵書ハ和漢書籍凡一万巻」とある。また、同年には東塾を売却した資金をもとに、咸宜園秋風庵の東側に書蔵庫が建設された²⁶。

咸宜園閉鎖後、明治三七年（一九〇四）に蔵書は広瀬宗家の所蔵となった²⁷。同四二年に宜園文庫の設立が企図された。「宜園文庫創立趣意書草案」（青邨文庫148）によれば、「今や昔時ノ紀念トシテ見ルヘキモノ僅ニ淡窓先生ノ旧居和齋堂、遠思楼及蔵書五千余巻ヲ存スルノミ」であり、これら「蔵書遺蹟等ヲ不朽ニ伝ヘ以テ徳育ニ裨益シ風教ヲ維持」することを目指したもの

であった。これは実現しなかったが、大正五年（一九一六）に淡窓図書館を設立することになった。次の文章がその経緯を説明している。

① 古泉学人『三隈鈔』⁽²⁸⁾

先是日田郡教育会にては、会の事業として、宜園文庫設立の議ありしと雖も、故ありて果さず、只僅かに数百冊の新刊書を以て、巡回文庫を起し、其素因を作りつ、ありしが、大正四年大典記念事業として、図書館建設に決し、同年十月工を竣へたるもの、実此淡窓図書館なり、本館三十二坪五合、玄関一坪三合、講演会場四十九坪五合、書庫八坪七合五勺、渡廊下二十二坪便所五坪、此建築経費金数千円、総て郡内有志及宜園縁故者等の寄附にして、敷地五百余坪は広瀬宗家の提供に係り、大正五年四月一日より開館、当時図書は、従来広瀬宗家に蔵せし、淡窓、旭荘、林外三先生等の遺著及蔵書七千余巻、並に元巡回文庫の新刊書籍等千数百冊に過ぎざりしと雖も、年々新刊の購入を為し、以て内容の充実を図りつ、あり。因に開館時限は毎日午前八時より午後十一時までなり。

咸宜園講堂跡に淡窓図書館が建設され、咸宜園蔵書は広瀬家から淡窓図書館に委託された。『増補淡窓全集』下巻例言によれば、その冊数は五五七六冊であったという。昭和二年（一九二七）刊行の『淡窓全集』下巻に掲載された目録は、次のように分けて作成され、伝来形態に従って函架番号別に書名と冊数が記された。

咸宜園蔵書 六二箱（四一三二六七〇冊、「東京行」二〇点一一三冊）

唐本類 三三箱（一二六二〇二四冊、「東京行」二点二〇冊）

梅墩莊（旭荘）蔵書 一五箱（一四五五八九二冊）

蔵書の合計は、六八四四五八六冊となり、ほかに「東京行」二二点一三三冊がある。「東京行」とは書籍の冊数の下に書かれた注記で、その書籍が東京にもたらされたことを示す。そのうちの一部は、現在、青邨文庫や国立国会図書館に所蔵されている。

昭和四五年（一九七〇）には、『咸宜園蔵書目録』が、杉本勲を代表者とする九州大学九州文化史研究施設の関係者ら二五名から組織されるメンバーによって進められた研究の一環として作成され、謄写版で出版された⁽²⁹⁾。この目録に補訂を加え、広瀬家蔵書目録とあわせて平成七年（一九九五）に出版されたのが『広瀬先賢文庫目録』である。平成元年（一九八九）淡窓図書館閉鎖によって、同館に寄託されていた咸宜園蔵書が先賢文庫（昭和四四年竣工）に戻されることになったのを機に作成されたものである⁽³⁰⁾。

おわりに

本稿で検討してきたことをまとめると次のようになる。

咸宜園蔵書の形成については、文政年間より塾生から毎月蔵書金を徴収して書籍を購入し、その蓄積の上に淡窓蔵書も加えることで、蔵書数は文久年間には五四〇〇冊以上に達した。

蔵書の出納や管理は蔵書監がおこなった。青邨・林外塾主時代には、東家と西家に蔵書が保管され、それぞれに蔵書監が置かれた。蔵書監には優秀な上等生が就いた。蔵書の管理のために、蔵書の架蔵状態に即して書名と本数を記した目録が作成された。蔵書点検の際に目録と書籍を対照して、書籍の紛失が調べられた。目録は、紛失や新規購入などによる蔵書増減に応じて補訂された。

淡窓塾主時代末期から死後直後にかけて作成・校正された蔵書目録を検討したところ、蔵書が東家と西家に分けて保管・管理されていたため、それに即した目録となっていた。しかし、明治七年までに架蔵方法が変わり、和刻本と唐本に分けたうえで、書籍箱に収めた。その過程で、咸宜園蔵書の整理がおこなわれたらしく、一部は広瀬家宗家に移動した。先賢文庫広瀬家蔵書のなかに旧咸宜園蔵書が混在しているのは、そのためである。

同年に大分県庁に提出された目録では、架蔵箱に付けられた番号の順番に従って記載される形式がとられた。さらに文久三年に死去した旭荘の蔵書目録が塾蔵書の目録とセットにされた。散逸したり東京に移されたり架蔵箱が変更したりして、明治七年の目録と『広瀬家先賢文庫目録』には異同もあるが、基本的には当時の架蔵形式や目録形式は、現在まで継承されてきたとみなされる。

淡窓や青邨の日記には、毎夏数日間かけて曝書していたことが記録されている。咸宜園蔵書が一五〇年余りの星霜を経て今日まで良好な状態に保たれてきたのは、塾主や塾生たちによって管理され、明治初期の売却の危機を免れ、閉塾後も散逸を危惧する有志や広瀬家によって維持されてきたためである。

咸宜園での淡窓の出版物販売の実態解明や咸宜園蔵書の内容分析は今後の課題としたい。

【註】

- (1) 杉本勲「咸宜園と洋学」(杉本勲編『九州天領の研究』吉川弘文館、一九七六年)、綱川歩美「史料紹介と翻刻 広瀬先賢文庫蔵書目録」(横山伊徳『近世後期における地域ネットワークの形成と展開 日田広瀬家を中心に』(文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書 研究代表者横山伊徳)二〇〇九年)。
- (2) 広瀬貞雄監修、中村幸彦・井上敏幸共編『広瀬先賢文庫目録』広瀬先賢文庫、一九九五年。
- (3) 三澤勝己「咸宜園の漢籍収集と塾生の閲覧」(『漢籍 整理と研究』一一、二〇〇四年)、「近世私塾の蔵書閲覧規定試考―蜚英館と気吹舎を事例として―」(『東洋文化』一〇〇、二〇〇八年)、「広瀬旭荘の咸宜園蔵書収集の発想について―柴秋村「肅舎義書目録序」を手がかりとして―」(『国士館大学経済研究要』二五、二〇一三年)。
- (4) 青柳は塾主を退いたあと日田を出て諸職を歴任し、明治一〇年東京に私塾東宜園を開設した。
- (5) 『淡窓日記』(家宝1-1-1)は、文化一〇年から安政三年まで四二冊に及ぶ。時期によって「淡窓日記」「遠思楼日記」「欽斎日曆」「醒斎日曆」「進修」「再修録」「甲寅新曆」に分かれ、日田郡教育会編『増補淡窓全集下巻』(思文閣、一九七一年)に収載されているが、本稿ではこれらを総称して『淡窓日記』と表記する。『林外日記』(家宝5-1-1)は、嘉永二年から明治四年まで二四冊に及ぶ。『青柳日記』(青柳文庫55)は嘉永二年から安政四年まで、『咸宜園日記』(家宝5-1-2)は文久元年から明治元年までのものが残っている。なお、日記ではないが、全集下巻所載の『万善簿』も使用する。
- (6) 三澤勝己前掲註(3)二〇一三年論文。
- (7) 柴緑著・柴直編『秋柳遺稿 附録』柴直、一九〇一年、四ウ〜五ウ。なお、本稿では史料中の漢字を新字体に改め、漢文に訓点を施した。
- (8) 三澤勝己前掲註(3)二〇一三年論文、六九頁。
- (9) 外題は「久兵衛殿伸平殿江相統候事」となっている。
- (10) 海原徹『広瀬淡窓と咸宜園 ことごとく皆宜し』ミネルヴァ書房、二〇〇八年、八四、八五頁。
- (11) 井上忠校訂「武谷祐之著『南柯一夢』」『九州文化史研究所紀要』一〇、一九六三年、七七頁。
- (12) 中島市三郎『教聖広瀬淡窓の研究』(増補訂正)(第一出版協会、一九四三年(一九三五年初版))の増補「塾則」一八頁に翻刻掲載されているが、後筆についての情報は欠いている。
- (13) 「宜園関係会計簿」には、安政六年から明治四年までの会計録一二冊が含まれる。詳細は、井上義巳「咸宜園の財政―塾主の会計記録より見た―」『日本教育思想史の研究』勁草書房、一九七八年(初出は一九七一年)参照。『養老編・養老外編』は弘化元〜三年および嘉永三年の会計録三冊である。詳細は、原田弘徳「咸宜園の経営」(日田市教育庁世界遺産推進室編『廣瀬淡窓と咸宜園―近世日本の教育遺産として―』日田市教育委員会、二〇一三年、第一章第五節)参照。
- (14) 井上義巳前掲註(13)。
- (15) 鈴木理恵『遠思楼詩鈔』初編の出版経緯『書物・出版と社会変容』二〇、二〇一六年。
- (16) 前掲註(5)日田郡教育会編『増補淡窓全集下巻』、二二三頁。
- (17) 南方厚蔵(安政二年入門)は『校正東家蔵書目録』に「台湾記事」「職原抄」を紛失した時の蔵書監として、石田鐵平は、『劉向説苑』(咸11-7)五、六表紙見返に、亀谷省軒(対馬の儒者)は、『咸宜園日記』元治元年五月一日条に、高嶋節之輔(明治二年入門)および広瀬敬四郎(旭荘の子)は『先哲叢談』(一般雑1-1)に記されている。
- (18) 当時孝之助が都講であったことは、『青柳日記』嘉永七年七月二日条によって知れる。
- (19) 林外も閏七月二日から三日間蔵書を検閲したことを日記に記している。二日条に「与三角之進清三郎一檢「東家蔵書」とある。『青柳日記』に記述はない。
- (20) 前掲註(2)『広瀬先賢文庫目録』三七頁には「林外自筆」とある。
- (21) 『家塾経費録』によれば、別紙綴に書かれた「洞莽筆記」「宋庵墨談」は文久二年六月までに購入され、原表紙見返に書かれた一〇点は同年末に購入されている。
- (22) すべての書籍について冊数が記されているわけではないので、正確な書籍数を提示するのは難しい。綱川歩美前掲註(1)は、西家目録が「二四〇点二四二四冊以上」、東家目録が「五三三三三三六五冊以上」としている(一六三頁)。
- (23) 林外の『読書録』(家宝5-3-3)の巻末に記載されている。慶応二年(一八六六)頃に林外によって記述されたものと思われる。

- (24) 咸宜園教育研究センターを通じて入手した写しによる。原史料は、前掲註(1) 横山伊徳らの共同研究によって作成された目録編の広瀬家文書八三三にあたりと考えられるが、未見である。
- (25) 文部省編『日本教育史資料九』文部省、一九〇四年(一八九二年初版)、四一三頁。
- (26) 日田市教育庁文化財保護課編『廣瀬淡窓の生家―廣瀬家の歴史と業績―』日田市教育委員会、二〇一二年、一一〇―一一一頁、一二二頁。
- (27) 『咸宜園蔵書目録』と『校正東家蔵書目録』の表紙に「明治三十七年我宗家ニ引受当時ノ在庫書籍……」と書かれた昭和二年の貞治氏による貼紙がある。
- (28) 古泉学人『三隈鈔』千原豊太、一九二五年、一二〇―一二一頁。本文に付されていたルビは省略した。
- (29) 杉本勲編前掲註(1)、五八一―五八三頁。杉本勲(代表者)『日田市立淡窓図書館保管 咸宜園蔵書目録』九州大学文学部九州文化史研究施設内、一九七〇年、凡例二頁。
- (30) 広瀬貞雄監修、中村幸彦・井上敏幸共編前掲註(2)、ii頁。

【付記】

本研究はJSPS科研費JP25381029の助成を受けたものです。本稿作成のために、廣瀬貞雄氏から公益財団法人廣瀬資料館先賢文庫の史料閲覧を許可いただき、史料調査では同館学芸員の園田大氏にお世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

Collection and Management of Books in Kangien

Rie Suzuki

Abstract: Kangien (a famous private academy in the Edo period) was established by Hirose Tanso in 1817, and continued under Kyokuso (Tanso's younger brother), Seison (the adopted heirs), and Ringai (Kyokuso's son) until 1871. In Kangien, the collection of books expanded to more than 5400 by the end of Edo period, by collecting money every month from students for more than 30 years. The books were divided into two collections, and were kept in the east and west houses of Kangien. The collections were managed by the Zosyokan, who were high-achieving students. The Zosyokan constructed the catalog of books and checked the books against it, recording titles and numbers of books. The catalog was revised and enlarged as books were lost and purchased. In Kangien, the books were divided into two parts (Japanese books and Chinese books), and Kyokuso's books were added by 1874. Since then the safekeeping of these books has scarcely changed. These books are currently kept in Senkenbunko, in the town of Hita (Oita prefecture).

Key words: Kangien, private academy, book collection, catalog of books

キーワード：咸宜園，学問塾，蔵書，蔵書目録